

後宮の秘薬師2
～銀の煙管と甘い双毒～

硝子町玻璃 Hari Garasumachi



アルファポリス文庫

序 楊鈴と双子

後宮。

そこは権力と陰謀が渦巻く女たちの世界。働く宮女や宦官を合わせると、二十人以上が暮らす大所帯である。

この日、とある妃に仕える侍女・楊鈴ヨウリンは黙々と庭の草むしりをしていた。

（こちらの草は咳止めの材料になる。この草は……ただの雑草かな）

摘み取った草を細心の注意を払って選別していく。毒にも薬にもならない雑草は、後でまとめて燃やすようにしている。

ところで、何故自分は一人で作業をしているのだろうか。

楊鈴はふと手を止めて、周囲をきよろきよろと見回した。同僚二人の気配がいつの間にか消えている。

（道理ですんなりといくわけだ）

これなら薬草を雑草と間違えられて燃やされる心配もない。同僚たちを捜しに行か

ずに、楊鈴はのんびりと作業を進めることにした。

「ようりーん！」

「何してるのー？」

そこに瓜二つの顔をした侍女たちがやって来る。楊鈴の同僚である紅梅ホシメイと黄桃ファンクオだ。

「何って草むしりですが」

「あっ、私たちもやってたね」

「休憩したら忘れちゃった」

二人ははっとした表情で、口元に手を当てた。

「もう少しで終わりますから、お二人は宮の中でお待ちください」

「ここで待ってるー！」

「終わったら、緑晶妃見に行こうよ！」

さりげなく邪魔者を追い払おうとする楊鈴に、二人はわくわくした様子で誘った。聞き慣れない名前に、楊鈴は「はい？」と首を傾げる。

「こないだ中級妃に昇格したお妃様なんだって」

「今日、新しい宮にお引越しするんだって」

「はあ……」

目を輝かせて説明する梅桃コンビだが、楊鈴の反応は鈍かった。上級妃ならともか

く、中級妃の昇格など特に珍しくはない。

めでたく位が上がっても、皇帝の愛を得られずに若さを枯らしていく妃が大半なのだ。

「緑晶妃って美人で評判なんだよ！」

「おまけに仕えてる侍女も美形揃い！」

「早く行こー！」

興味を示そうとしない楊鈴の両腕を、梅桃コンビがぐいっと力任せに引っ張る。草むしりは、もうどうでもいいらしい。

（選択肢がない）

楊鈴は小さく溜め息をつき、洪々ながら二人についていくことにした。

中級妃ともなると、専用の住まいが与えられる。宮の周りには、既に大勢の下女や宦官たちが集まっていて、彼女たちの到着を今か今かと待っていた。

「楊鈴、あの人が緑晶妃だよ」

黄桃が指を差したのは、濃緑の衣に白い上着を羽織った妃だった。はっきりとした目鼻立ちで、凛とした雰囲気を持つ女性である。

緑晶妃の後ろには、数人の侍女たちが付き従っていた。梅桃コンビが話していた通

り、容姿が優れた女性ばかりだ。

そして最後尾を歩いているのは、同じ顔立ちをした二人の侍女だった。

「あ、見て。玲玲様と珠珠様だ」

「今日も完璧だね」

二人を眺めながら、梅桃コンビは声を弾ませた。ほかの見物人たちの視線も、彼女たちに釘付けになっている。

「いやあ、双子の美人って神秘的だねえ」

楊鈴たちの近くにいた宦官が、鼻の下を伸ばしながらしみじみと言う。しかし、梅桃コンビの存在に気がつくのと、気まずそうな表情を浮かべた。

「あ、何かごめん……」

「謝らなくても大丈夫です。この二人は双子ではありませんので」

申し訳なきように謝る宦官に、楊鈴は小さく首を横に振った。

「そうなの？ それならいいんだけどさ」

「そういう問題じゃないよ、楊鈴」

「おじさんも納得しないでよ」

梅桃コンビがふてくされた様子で唇を尖らせる。それを無視して再び双子に視線を戻した楊鈴は、そのうちの一方の右目尻に泣きぼくろがあることを見つけた。

「ぼくろがあるのは、どちらのほうなんですか？」

「お姉さんの玲玲様だよ。あの小さなぼくろのおかげで、それぞれ違った魅力が生まれてるんだよねえ」

楊鈴の質問に答えたのは、先ほどの宦官だった。腕組みをしながら、うんうんと頷いている。

「あれだけで見分けがつくのっていいよね」

「私たち、服の色でしか見分けつかないもんね」

梅桃コンビが美人姉妹に羨望の眼差しを向ける。

「でしたら、お二人もぼくろをつけてみてはいかがですか？」

楊鈴としても、服装以外に二人を識別するための一目瞭然の特徴が欲しい。何気なく提案すると、梅桃コンビの顔に満面の笑みが浮かぶ。

「じゃあ、私つける！」

「ずるい。私も！」

「せめて左右別々にしてくださいね。お揃いだという意味がありませんから」

「明日は右にする！」

「明後日は私が右！」

「毎日入れ替えっつ。あははー」

二人は顔を見合わせ、あっけらかんと笑った。
 「……お嬢ちゃん、この子たち本当に血の繋がらないのかい？ 本当に？」
 信じられないといった表情で尋ねる宦官に、楊鈴は「多分」とだけ答えた。

第一話 楊鈴と蜂蜜

「「今日も……生きる！ 楽しく……生きる！ 仲良く……生きる！ 笑って……生きる！」」

本日も奇妙なかけ声から楊鈴たちの一日は始まった。

（前から気になってるんだけど、これって何の意味があるんだろう）

疑問に思いながら、楊鈴は白粥と具だくさんの汁物を食べ進めていく。今朝は甘味に小さな月餅げっぺいも添えられている。その中身は甘酸っぱいなつめ餡だ。

腹はらごしらえを終えると、すぐさま朝の仕事に取りかかる。惰眠をむさぼる主あまじを叩き起こし、各部屋を手早く掃除していく。

「あんたたち、朝から元気ねえ……」

三人の主である銀流妃ぎんりゅうは、気だるそうに三人の働きぶりを眺めていた。その手には、酒瓶と杯がしっかりと握られている。

「銀流様だけずるい！」

「私たちも飲みたい！」

「あーはいはい。後で分けてあげるから、さっさと掃除しなさいよ」
 酒瓶に熱い眼差しを送る梅桃コンビに、銀流妃はしゅしゅと手で追い払うような仕草をした。

(ダメ人間が三人)

楊鈴は棚を拭きながら、酒飲みたちのやり取りを聞いていた。桶の水が濁ってきたので、水場へ交換に向かっていると玄関の扉を叩く音が響く。

「おはよう小楊」

来客は温厚そうな中年の男だった。医局に勤めている宦官の一人である。

「新しい薬の材料が届いたから、いつもみたいに片づけを手伝ってくれないかな？
 楊鈴たちが来てくれると、作業がはかどるんだよ」

宦官はそう言って、朗らかに笑った。本来、侍女が医局の仕事場に立ち入ることは禁止されているのだが、度々こうして頼みにくるのだ。

「分かりました。掃除が終わったらすぐに……」

「喜んで！」

いつの間にか楊鈴の後ろにいた梅桃コンビが元気に返事をする。そして手にしていた箒や雑巾を投げ捨てて、宮から出て行ってしまった。

(引き止める間もなかったな……)

床に残された掃除道具を拾い上げ、楊鈴も急いで医局に向かう。元葉師だった彼女にとって、薬の材料を整理する作業は密かな楽しみだった。

医局は届いたばかりの材料で溢れ返っていた。

床には麻袋や木の箱が無造作に積み上げられ、足の踏み場もない状態である。医官たちはその間を縫うように歩きながら、荷札と中身を照らし合わせていた。

「おじさん、こちらの薬草はこの引き出しではありませんよ」

「あれ、そうだったっけ？」

「それと、この瓶もしまうところが違います」

「ほんとだ。小楊、よく覚えてるねえ」

薬草が入った瓶を受け取り、医官が感心した様子で言う。相変わらずのやぶ医者ぶりである。

(念のためにほかの棚も確認しておくか……)

これは長期戦になりそうだと、楊鈴は覚悟を決めた。

「この壺、綺麗だね」

「見たことないね」

一方、梅桃コンビは作業を放り出し、木の実が入った壺に目を奪われていた。つる

りとした表面に鮮やかな牡丹ぼたんの模様が施されている。

「ああ、それ？ 今回から新しく取引を始めた仕入先で使われているものだよ。帝都でも人気の卸業者なんだって」

医官はそう言いながら、別の壺を手にとった。こちらに描かれているのは青紫色の菖蒲しょうぶだ。

「後宮では一般競争入札の方式を採っているんですけどっけ？」

「そうそう。食料品や木簡とか筆みたいな消耗品も、いろんな業者のうちで一番いい条件を出したところから仕入れるようにしてるんだ。前に一度、入札の審査に立ち会ったことがあったけど、どの業者も試供品の数が半端なかつたなあ。気迫がすごくてちょっと引いちゃったもん」

医官がその時の様子をしみじみと語る。

（そりゃ、みんな必死になるでしょうね）

後宮の仕入先を選ばれるということは、それだけで大きな名誉となる。さらに納入を通じて、宮中の人間と接点を持つてるといふ利点もある。

将来、国内有数の大商會に成長することも夢ではないのだ。

「はいどうぞ。手伝ってくれたお礼ね」

片づけを終えると、医官は角煮入りの包子パオズを出してくれた。侍女の楊鈴たちにとつては、減多に食べられない肉料理である。

この日は天気がいいので、共用庭園で食べることにした。今の季節は木槿むくげの花が満開に咲いている。

「おいしーっー」

梅の木の下にある腰かけに座り、蜜桃コンビが幸せそうに包子を頬張る。楊鈴もぺろりと完食して、持参してきた茶で喉を潤した。

「そういえば、以前話していた恩人が見つかりました」

「恩人？」

「誰それ？」

突然思い出したように話す楊鈴に、蜜桃コンビはきよとんと首を傾げた。

（そうか、この二人にはまだ話していなかった）

楊鈴は「誰にも言わないでくださいね」と前置きしてから、自分の身の上を語り始めた。

かつて、薬師の祖母とともに貧しい暮らしを送っていたこと。

祖母は生計を立てるために、毒物も取り扱っていたこと。

ある日、一人の少年から薬を調合したお礼として簪かんざしをもらい受けたこと。

それを質屋に売ったおかげで、生活が楽になったこと。そして、その簪を買い戻すために後宮で働き始めたこと。それらをかいつまんで説明すると、梅桃コンビはしみじみとした表情を浮かべた。

「楊鈴って苦勞人だね」

「世知辛い人生だね」

「で、恩人って誰？」

二人揃って身を乗り出して、楊鈴に話の続きを促す。

「銀流様の兄君である蒼波様です。私もつい最近知ったばかりですが」

「やっぱり……」

「道理で……」

その名を聞いて、梅桃コンビは顔を見合わせ、何かを悟ったかのように深く頷いた。

（やっぱり？ 道理で？）

二人が何に納得しているのか、楊鈴には理解できなかった。

「そんなわけで……現在、簪は顔なじみの質屋に保管されてまして」

「うんうん」

「蒼波様が買い取るとおっしゃったのですが」

「それでそれで？」

次の展開を待ち切れないといった様子で、二人が合いの手を入れる。

「そこまでしていただく理由もありませんので、お断りしました」

「えっ」

途端、梅桃コンビの笑顔が凍りついた。

「理由ならあるじゃん……」

「何で分かんないの……？」

そう言いながら、楊鈴の肩を揺さぶってくる。いつになく真剣な表情の二人に、楊

鈴は戸惑いを覚えていた。

「そんなことをおっしゃられましても……」

「兄者が襟巻きくれたことあったでしょ？」

「あれも楊鈴がいたからなんだよ」

今明かされる真実に、楊鈴の表情がどんどん曇っていく。

「それはつまり……死ぬまで薬のお礼が続くということでしょうか？」

たかが薬を一服調合したぐらいで、一生涯の恩義を押しつけられても困る。今後も続くかもしれない恩返しを想像して、楊鈴は軽く溜め息をついた。

「普通は気づくよね……」

「もはや才能だよね……」

梅桃コンビがぼそぼそと呟いているが、よく聞こえない。とりあえず、今後蒼波からの贈り物は受け取らないようにしようと、楊鈴は心に決めた。

「ところで話は変わりますが、明日からしばらく出稼ぎに行つてきますね」
 「どこに行くの?」

「アワビ漁船?」

「緋蘭妃様のところです」

後宮で最高位に位置する四夫人、そのうちの一人である緋蘭妃。

彼女に仕える侍女が親族の葬儀のため里帰りしており、手伝いにきて欲しいと楊鈴に声がかかったのだ。

(たまにはほかの職場見学ということ)

それに、緋蘭妃には以前金箔を分けてもらった件で借りもあるし、断る理由もない。「というわけですので、私がない間、お二人で銀流様の介……お世話をよろしくお願ひします」

介護、と言いかけて楊鈴は訂正した。

「そんなの楽勝だよ」

「お土産よろしくね」

楊鈴が軽く頭を下げると、梅桃コンビは自信満々に頷いた。

(私が来る前は二人でこなしてたんだし、何の心配もな……)

掃除の最中に銀流妃に酒をねだる二人の姿がふと脳裏に蘇ったが、深く考えるのも面倒なので、楊鈴はその記憶を手放すことにした。

「楊鈴、そろそろお茶にしましょう。今、用意するわね」

「ありがとうございます」

泊まり込みで緋蘭妃の宮で働き始めてから一週間。楊鈴は平穏な日々を送っていた。銀流妃の宮に比べて広い造りになっているが、その分侍女の数も多い。それに作業分担もしっかりしているため、効率よく仕事が進むのだ。

何より日中から酒の臭いが充満していないという真つ当な環境に、楊鈴は安らぎを感じていた。

「楊鈴が緋蘭妃の下で働くなんて……きっと何か特別な任務を受けているに違いないわ!」

以前、毒事件で熱弁を振るっていた侍女は、例によって鼻息を荒くしながら迷推理を披露しているが。

(ずっとここにいたいな)

ほんやりと茶を啜っていると、侍女の一人に声をかけられた。

「楊鈴、尚宮局の石榴様がお見えになっっているわよ」
 「石榴様が？」

「あなたに聞きたいことがあるって」

後宮の総務全般を担当している部署の統括者である。すぐさま玄関に向かうと、石榴に「お呼び立てして申し訳ありません」と頭を下げられた。

「銀流様たちが何か問題を起こしましたか？」

「いえ、今回は違います」

そう言って、石榴が自分の背後を振り返る。そこにはすらりとした細身の妃と、小柄な宮女が立っていた。

「初めまして。わたくし、本日入宮いたしました小蓮シヤシレと申します。こちらは侍女の禾香シヤクですわ。どうぞよろしく」

小蓮妃がにこやかに自己紹介すると、その隣で禾香が深々と頭を下げた。
 （いかにも神経質そうなお妃様だな）

小蓮妃の顔立ちを一目見るなり、楊鈴はそう感じた。

やや吊り上がった目と肉の落ちた頬。そして、強く引き結んだ口元が張り詰めたような緊張感を滲ませている。

この手の女性とは、あまり関わりたくない。

「小蓮様が銀流様の宮へご挨拶に伺ったのですが、いくら戸を叩いても一向に返事がないとのこと。いつお戻りになるのか、ご存じありませんか？」

「銀流様なら本日は宮にいらっしやるはずですよ。お茶会の予定もなかったと思いませんし……」

それに、本人が爆睡していたとしても、蜜桃コンビが来客の訪問に気づかないはずがない。その二人すら姿を見せないということは、何らかの異変が起きているのだろう。

「……嫌な予感があります。私たちも様子を見に行ってみましょう」

楊鈴と同じ考えに至ったのか、石榴が深刻そうな顔で視線を向けてくる。

「私も一緒に行くんですか？」

「当たり前でしょう。銀流様たちに何かあったのかもしれないですよ」

自分を指差して尋ねる楊鈴に、石榴は語気を強めた。そこへ話を聞きつけた緋蘭妃の侍女たちが集まってきた。

「こっちの事は大丈夫だから、早く行ってらっしゃい」

「そうよ。宮の中で死んでたらどうするの」

面倒臭いからといって、拒否できる雰囲気ではない。彼女たちに真剣な眼差しで促され、楊鈴は洪々ながら銀流妃の宮に向かった。

「紅梅さーん、黄桃さーん」

同僚の名を呼びながら玄関の扉を叩いてみるが、何の反応もない。

(三人でどこかに出かけたのかな)

しかし扉は鍵がかかっていなかったのか、そのままなりと開いてしまった。楊鈴は訝しみながらも、扉を押し開く。

次の瞬間、中から鼻をつくような臭いがし、楊鈴は素早く扉を閉めた。背後にいた小蓮妃と禾香も「くさっ」と大きく飛び退いた。

「石榴様、帰りませんか？」

「いいから入りますよ。早く開けてください」

楊鈴の申し出が聞き入れられることはなかった。再び扉を開けて、謎の異臭が立ち込める宮内を進んでいく。

やがて居間に辿り着くと、床に転がっていた空かの酒瓶が楊鈴の足元にぶつかった。(あそこにいるのは……)

赤い絨毯じゅうたんの上に散らばる艶やかな黒髪。楊鈴の視界に、真っ先に飛び込んできたのは、酒瓶を抱えたまま眠りこける主の姿だった。

「酒は飲んで……」

「飲まれるな……」

大の字になって爆睡中の梅桃コンビが僅かに口を動かし、寝言を漏らしていた。

(これはひどい)

楊鈴は悪夢のような光景を目の当たりにして、無言で天井を見上げた。

その隣では石榴が床を見下ろしながら、小刻みに肩を震わせていた。

「あなたたち、起きなさいっ!!」

まるで雷鳴のような怒声が、居間中に響きわたる。しかし三人は目を覚ますどころか、誰一人として微動だにしない。

「仕方ありませんね……楊鈴、今すぐ井戸から水を汲んできてもらえますか？」

「非道に走りたい気持ちは分かりますが、ここは私にお任せください」

床を水浸しにしたなら、絨毯が使い物にならなくなる。強硬手段に出ようとする石榴を止め、楊鈴はぼそりと言葉を発した。

「あ、蒼波様」

途端、銀流妃と梅桃コンビはかっと目を見開き、寝起きとは思えない俊敏な動きで椅子に飛び乗った。

「おはようございます、銀流様」

「あら、楊鈴じゃない。緋蘭妃のところじゃなかったの？」

「諸事情で一時帰宅しています」

楊鈴は多くを語ろうとはしなかった。すると、小蓮妃が蔑みの表情を浮かべながら、銀流妃の前に進み出た。

「こ、こんな床の上で平気で寝るなんて信じられないわ！ 噂には聞いていたけれど、まさかここまで品がないとは思いませんでした！」

「は？ 何よこの女」

見ず知らずの相手に非難され、銀流妃の表情が険しくなる。

「銀流様、こちらの方は本日入内じやうだいされた下級妃です」

不穏な気配を感じ取り、すかさず石榴が両者の間に割って入る。けれど、二人の間に生じた火花は激しさを増していく。

「ふうん。ずいぶんと生意気な口をきく新人じゃない」

「こんな方が中級妃だなんて、驚いてしまいますわ。所詮お家柄さえよければ、知性などなくとも出世できますのね」

「は？」

新人妃が大きな溜め息をついた瞬間、銀流妃の顔はすつと無表情になった。

ゆらりと立ち上がり、小蓮妃に殴りかかろうとして「銀流様やめてー！」「暴力はしたーい！」と蜜桃コンビに両脇から必死に止められている。

「小蓮様、不用意な発言はお控えください」

石榴はやりわりと小蓮妃を諫めると、銀流妃に鋭い視線を向けた。

「まったく、あなたときたら白昼堂々この有り様……飯にもあなたは中級妃なのですよ！」

「うるさいわね。頭に響くから、そんな大声を出すんじゃないわよ」

「銀流様っ！」

反省の色をまったく見せない銀流妃に、石榴の語気が荒くなる。その怒りは蜜桃コンビにも向けられた。

「あなた方は侍女の立場を忘れたのですか？ 主と酒盛りをするなど言語道断です！ 恥を知りなさい！」

「いめんなさいっ！」

蜜桃コンビは顔面蒼白になりながら、床に膝をついてひれ伏した。その間も楊鈴は周囲に散乱している酒瓶を拾い集めていた。

（たった一週間でここまで荒れ果てるとは……）

蒼波がこの惨状を目にしたら、怒りを通り越して卒倒しかねない。

「楊鈴、緋蘭妃の宮での務めはいつまで続くのですか？」

「あと十日ほどかかるかと思えます」

楊鈴がそう答えると、石榴は深い溜め息をついた。

「……この三人を、野放ししておくわけには参りません。それまでの間は私が一日三回、こちらへ様子を見に来ることにいたします！」

「一日三回も……」

「女版兇者が……!?!」

声高らかに宣言する石榴に、梅桃コンビの表情が絶望に染まっていく。流石の銀流妃も危機感を覚えたのか、勢いよく楊鈴を振り返る。

「……楊鈴。あんた、そろそろ戻ってきなさいよ」

「私の一存では決められないので、緋蘭様にご相談してみます」

梅桃コンビからもすがるような眼差しを向けられるが、それ以上何も言わずに居間を後にした。

（戻ってこいと言われましても、緋蘭妃が許可してくださるか分からないし）

上級妃の意向には逆らうことができない。

緋蘭妃の宮に戻ると、楊鈴はすぐさま事情を説明した。「あなたが戻る必要はないでしょう」と引き留めてくれると期待して。

しかし、現実には楊鈴に冷たかった。

「このようなことで、石榴の仕事を増やすわけには参りません。もうこちらでの仕事は結構ですので、今すぐ銀流妃の元にお帰りなさい」

「緋蘭様……」

「少しの間でしたが、お世話になりました。侍女たちも、あなたの働きに心から感謝しております」

「滅相もございません。私こそ、大変お世話になりました」

帰りたくないと言える雰囲気ではない。こうして楊鈴の出稼ぎ生活は終わりを迎えたのだった。

それから数日後の朝。いつもと変わらない白粥を食べていると、梅桃コンビがある話題を振ってきた。

「講習会ですか?」

「あの小蓮って妃が開くんだったって」

「誰でも参加できるんだって」

紅梅が差し出した木簡には、『内側から輝くための食の教養』と仰々しい文言が書かれていた。

「胡散臭い匂いがプンプンしますが」

「おやつも出るよ!」

「タダなんだって!」

食いしん坊の二人が爛々と目を輝かせる。
 (確かに少し気になる)

「甘いものに目がない楊鈴にとっても、魅力的な誘いだ。
 「それでは、銀流様もお誘いして一緒に行きましようか」
 「ううん。銀流様は行かないって」

「小蓮妃を見たら殴るかもって」
 楊鈴の提案に、二人は首をふるふると横に振った。

(初手で暴力に走ろうとしている)

そんな荒くれ者を連れて行くわけにはいかないので、朝の掃除を終えると楊鈴たちは三人で講習会に向かった。

会場となっているのは、後宮の北側にある広場だった。いくつもの机が用意され、下級妃を始め、侍女や下女、さらには宦官までが席についている。

そこに金色の衣を纏った小蓮妃が現れた。

「皆様、わたくしの講習会によるこそお越しくございました。本日は有機食材がもたらず効能について、ともに学んで参りましょう」

小蓮妃はたおやかに微笑み、集まった受講者をゆっくりと見渡した。

(おっと、洗脳教育か)

楊鈴は僅かに眉を寄せた。

「楊鈴、有機食材って何？」

「勇気が出る食材？」

「簡単に言えば虫殺しの薬に頼らずに育てた作物や、それらを使った食品ですね」

首を傾げる梅桃コンビに、楊鈴は小さな声で説明した。早くも雲行きが怪しくなってきたと思いつつながら。

楊鈴の不安をよそに、小蓮妃は流れるような口調で語り始める。

「ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、わたくしの実家は商いを営んでおりまして、一年ほど前から虫殺しの薬を使わない食材の取り扱いを始めました。わたくし自身も、実家におりました頃はこのようなものを食していましたのよ」

小蓮妃の侍女たちが籠を抱えて、受講者たちの席を回っていく。

その中に入っているのは、虫に食われて穴だらけの野菜だった。参加者たちの表情が一瞬にして強張る。

言いようのない緊張感が会場を包む中、小蓮妃の顔から優雅な微笑みが消えた。

「よいですか、皆様。虫殺しの薬は食べ物を通して体内に少しずつ蓄積されていき、知らず知らずのうちに皆様の健康を蝕んでいく恐ろしい毒なのです。それによって肌は本来持つ輝きを失い、美貌も損なわれてしまいます。そう……虫殺しの薬は女性の

敵にほかなりません」

小蓮妃が発した言葉に、数人の下級妃がはっと息を呑んだ。

「そして、毒に侵されているのは田畑の作物だけに留まりません。そんな作物から作られる飼料を食べた家畜の肉もまた、汚染されているのです。この真実を知ったわたくしは、それらの食物をきっぱりと断ちました。そのおかげで、以前にも増して美しい肌を手に入れたのです」

陶器を思わせる白い頬に指を滑らせ、小蓮妃は自信に満ちた笑みを浮かべた。
初めこそ半信半疑だった受講者たちは、小蓮妃に崇拜にも似た尊敬の眼差しを注いでいる。

(ずいぶんと話術に長けていらっしやる)

参加者たちの心を掴んだ小蓮妃の手腕に、楊鈴は感心していた。

美しさを至上とする後宮において、小蓮妃の主張は強い説得力がある。特に上を指している下級妃には、さぞや魅力的に聞こえただろう。

「ヤバいねー」

「意識高い系だねー」

楊鈴の隣では、美意識に無頓着な梅桃コンビが声を潜めて頷き合っていた。

講習会を終えて銀流妃の宮に帰る頃には、辺りは薄暗い夕暮れ時となっていた。

「あ、おかえり。おやつはどうだった？」

「……………」

主の問いかけに何も答えず、楊鈴は懐から小さな巾着袋を取り出した。口を開けて逆さになると、黒い米粒のような物体が机に散らばった。

「ちよっと、ネズミの糞を置くんじゃないわよ！」

「こちらがおやつです」

「えっ、これを食べたの？」

銀流妃が目を見開いて楊鈴の顔を凝視する。流石の主も本気でドン引きしている模様だ。このまま黙っていても面白そうだが、楊鈴はすぐに正体を明かすことにした。

「小蓮様のご実家の商品で、雑穀を粉にして練り上げ、蒸し固めたお菓子とのことです。まずは銀流様に召し上がっていただきたくて、食わずに持ち帰って参りました」

「どうぞどうぞ！」

「まずは一口！」

主に毒見をさせるべく、梅桃コンビも明るい笑顔で勧める。

「まあいいけど……あんなたちも道連れよ」

銀流妃に魂胆を見透かされ、結局全員で食べることになった。すぐに吐き出しても

いいように、楊鈴が数枚の紙を用意する。

「せーの……」

楊鈴の静かな合図とともに、四人は一斉に菓子を口に放り込んだ。

「……意外といけるわね、これ」

「もつと食べたーい！」

口の中に炒り雑穀の香ばしさが広がり、素朴な甘みと僅かな塩気が後を引く。淡泊ながらも、不思議と病みつきになる味わいだった。

「皆様、お待ちください」

次々と手を伸ばす三人を、楊鈴が制する。

「このままでは流石に見栄えが悪すぎるので、私が少し手を加えてきます」

そう言っ、残りの菓子を巾着袋に戻し始める。梅桃コンビの手元からも取り上げて、楊鈴は厨房に向かった。

（この風味を活かすには……）

まずは包子の生地を作り、そこにすり鉢で細かく潰した菓子を香り付けとして少量混ぜ合わせて発酵させる。その間に棗と胡桃を蜜で煮詰めたものを具材として生地包み込み、じっくりと蒸していく。すると、次第に香ばしい匂いが厨房に漂い始めた。

「楊鈴？」

声をかけられて振り返ると、堅物の武官がいつの間にか背後に立っていた。

「こんばんは、蒼波様。本日はいかがなさいましたか？」

「あ、いや……先日、銀流がまた酒でやらかしたと聞いたので、きつく注意をしようと思ったんだが……」

そう言いながら、楊鈴の様子を窺うようにじっと見つめてくる。

（視線が痛い）

蒼波と顔を合わせるのには、簪の買い取りを断って以来だ。もしかしたら、あの時のことをまだ気にしているのかもしれない。

（見かけによらず、繊細なお方だな）

楊鈴は小さく溜め息をつくくと、蒸籠の蓋を開けて中を覗き込んだ。白い蒸気とともに甘い香りがふわりと立ち込める。

「ちょうどいいところに来てくださいました。蒼波様もお一ついかがですか？」

そう言っ、出来立ての包子を小皿に載せて蒼波に差し出した。

「あ、ああ。ありがとう」

蒼波は戸惑いながらもそれを受け取った。甘いものが好きなのか、珍しく頬を緩ませている。

「兄者嬉しそうだね……」

「よかったね……」
「お二人もお熱いうちにどうぞ」

厨房の入口で二人の様子を眺めていた梅桃コンビが、「はーいっ！」と返事をして駆け寄ってきた。

「さっきより美味しくなったね」
「ネズミの糞なのにね」

早速包子を頬張った二人が無邪気に感想を言い合う。その瞬間、包子を半分ほど食べていた蒼波の体がぴたっと硬直した。

「楊鈴……!?!」

「誤解です。そんな顔をなさらないでください」

楊鈴が事の経緯を手短に説明すると、蒼波はあからさまにほっとした様子を見せた。「お前ならやりかねないから……」

「蒼波様。小蓮妃のご実家が経営されている商会について、何かご存じですか？」
蒼波の眩きを聞き流し、楊鈴は何気ない口調で尋ねた。

「そうだな、主に食料品を中心に手広く商売をしているらしいが……気になることでもあるのか？」

「いえ、特には。ちょっととした好奇心です」

さりと切り返して、蒸籠の中の包子を平皿に移し替えていく。背後から伸びてきた指先が、そのうちの一つをかすめ取った。

「あちっ、あちちっ……うまっ」

つまみ食いの犯人は銀流妃だった。

「銀流、行儀が悪いぞ」

「誰に言ってるのよ」

蒼波に咎められても銀流妃は気に留めず、楊鈴へ視線を向ける。

「ていうか、商会のことが知りたいなら詳しいのが一人いるじゃないの」

主の言葉に、楊鈴はある人物を脳裏に思い浮かべた。

「で、私のところに来たってわけ？」

夏の晴れ渡った空のような双眸が不快そうに歪む。楊鈴と梅桃コンビが訪れたのは、四夫人の一人である星系妃の宮だった。

「はい。豪商のご出身であるあなた様でしたら、そちらの方面の事情についてよくご存じかと思ひまして」

にこやかに説明しながら、楊鈴は持参した風呂敷の中から小さな瓶を取り出した。

「何それ」

「私が調べた保溼液です。お休み前にお顔にお塗りいただくことで水分を閉じ込め、翌朝にはふっくらとした弾力肌が実感できるかと。よろしければお使いください」
 「……まあ、もらっておくわ。ちょうど退屈していたところだし、小蓮の実家のことを教えてあげる」

「どうやら献上品に気をよくしたようだ。星系妃の心を少しだけ開くことに成功した。ありがとうございます、星系様」

「礼なんていいわよ、鬱陶しい。それにしても、まさかあの家の娘が後宮にね……」

「名の知れた商会なのですか？」

「悪い意味でね」

星系妃は冷やかな表情で言い切った。

「小蓮の両親は、同業者の間じゃ有名なぼったくり商人なのよ。強引に品物を買叩いては、法外スレスレの値段で売りつける。お父様も『信用など露ほどもない連中だ』って言ってたわ」

「星系様のおうちは？」

「ぼったくってない？」

「当たり前でしょうが！ 信用第一でやってるわよ！」

あらぬ疑いをかけられ、星系妃が蜜桃コンビを鋭く睨みつける。

「お二人が失礼しました。つまり小蓮様のご両親は同じ商人からも疎まれているということですか？」

「ええ。利益を生むためなら何だってする。どうせ、コネでも使って娘を後宮に入れてたんですよ。商会の名を売るための、都合のいい宣伝材料ってところかしら」

「それでは、あの講習会も……」

「あの女だって、自分がやってることは理解しているはずよ。私のところに挨拶に来なかったのも、それを指摘されなくなかったからでしょ」

星系妃は呆れ顔で肩を竦めた。

「ちよっと可哀想……」

「親は選べないね……」

「はあ？ そんなの言いなりになってる本人が悪いのよ」

小蓮妃の境遇を知って同情する蜜桃コンビに、星系妃が素っ気なく言い放った。その唇には蔑みの笑みが浮かんでいる。

「ああいう狭い世界で生きている女は、一度痛い目に遭ったほうがいいのよ」

「痛い目に？」

「星系様みたいに？」

「ほんつとに失礼な奴らね……」

いつぞやの帝都観光がトラウマになっていているようだ。梅桃コンビに痛いところを突かれて、星系妃は小さく舌打ちをした。

「……もういいでしょ。用事が済んだらさっさと出て行って」

「はい、貴重なお話ありがとうございました。あ、それとこちらは銀流様からです」

楊鈴は巾着袋から例の菓子をとり出すと、星系妃の前にもろんと置いた。青い双眸がぎよっと見開かれる。

「では、お二人とも帰りましょうか」

「はい」

後ろから甲高い悲鳴が聞こえるが、楊鈴たちは無視して星系妃の部屋を立ち去った。

その後も小蓮妃の講習会は月に数回ほど開催され、毎回多くの参加者で賑わっていた。小蓮妃の影響を受けて、肉料理を食べない下級妃も増え始めているという。

「私たちも講習会参加しようよ」

「食の素晴らしさを学ぼうよ」

駄々をこねる梅桃コンビに、楊鈴は諫めるように言った。

「星系妃の話が本当なら、小蓮妃には関わらないほうがよろしいかと。それに、お二人は例のお菓子が食べたいだけですよね？」

「楊鈴は食べたくないの？」

「あんなに美味しいのに？」

「私、雑穀はあまり好みではありませんから」

二人に詰め寄られても、楊鈴の意志は変わらない。

「あなたたち。いつも楊鈴に迷惑かけてんだから、少しは言うこと聞きなさいよ」

楊鈴に一番迷惑をかけている本人が口を挟む。

「楊鈴の意地悪！」

「私たちだけで行こ！」

ふてくされたようにそっぽを向く梅桃コンビに、銀流妃はひらひらと手を振った。

「ふーん、行つてらっしゃい。緋蘭妃から荔枝ライチもらったけど、あなたたちの分はなしね」

「やっぱり行くのやめまーすっ！」

三人のやり取りを聞きながら、楊鈴はこっそり一枚の木簡を眺めていた。尚服局の元同僚からもらったもので、本日の講習会の詳細が書かれている。どうやら、小蓮妃の実家で取り扱っている品々が振る舞われるらしい。

(いよいよ本番ってことかな)

梅桃コンビに気づかれないうちに、楊鈴はそれを懐にしまい込んだ。

それから数時間後の昼下がり、突如として一人の訪問者が銀流妃の宮へ駆け込んできた。

「ちょ、ちょっと小楊借りてもいいかな!?」

いつも楊鈴たちを頼ってばかりの医官である。

「まさか、患者に処方とは異なる薬を渡してしまいましたか?」

このやぶ医者なら、やりかねない。

「そんなのしょっちゅう……じゃなくて、すぐに北側の広場まで一緒に来て欲しいんだよ!」

今まさに、小蓮妃の講習会が開かれている場所である。嫌な予感がして、楊鈴は眉をひそめた。

「事件の匂いだ!」

「私たちも行く!」

楊鈴の背後で梅桃コンビが拳手をする。

(人手は多いほうがいいだろうし)

というわけで、楊鈴は二人を連れて会場に向かうことにした。

「それでは銀流様、行って参ります」

「行ったらー」

緩い声で見送られて宮を出た。

急いで現場に向かうと、大勢の野次馬が集まっていた。人垣を押し分けて進んでいくと、講習会の参加者たちが苦しげな表情で地面にしゃがみ込んでいる。

楊鈴は彼らの様子をまじまじと見た。

(唾液を垂らしながら、しきりに口元を触っている……毒による神経麻痺かな)

中毒症状を起こしているのは一部だけのようだ。被害を免れた下級妃が青ざめた顔で事の次第を切々と医官たちに訴えている。

「試供品として何種類かの蜂蜜が出されたのですが、そのうちのの一つを口にしたら突然苦しみ出して……きつと中に毒が入っていましたのよっ!」

皆が一斉に机の上に視線を向けると、そこには琥珀色の蜂蜜が鎮座していた。

「そ、そんな……違います! 私たちは毒など入れておりませんっ!」

禾香をはじめとする小蓮妃の侍女たちが必死に声を張り上げる。当の小蓮妃は引きつった表情でその場に立ち尽くしていた。

(まあ、致し方ない)

これほどの大衆の中で、実家の商品を扱って騒ぎを起こすなど到底考えられない。楊鈴は患者の背中を擦りながら、彼女たちの訴えに耳を傾けていた。

「まずは口の中に残っている蜂蜜を洗い流しましょう。紅梅さん、黄桃さん。急いで

水を汲んできてください」

「かしこまりっ！」

梅桃コンビが慌ただしく走り去っていく。それと入れ替わる形で黒装束の集団が現れる。

(冬天宮の宦官まで動いたか……)

後宮の罪人収容所である冬天宮。その管理者たちの登場に、会場の空気が一層張り詰める。

「医局はここにある蜂蜜をすべて調べろ。我々はこの者たちを連行する」

黒装束の筆頭が厳しい声で言い放つと、宦官たちが小蓮妃とその侍女らを取り囲んだ。

「こ、これは何かの間違いですわ！ わたくしの両親は誠実に商いを営んで……っ！」
両親の名誉を守ろうとする小蓮妃の訴えは届かず、力づくで広場から引きずり出されていく。

(両親を庇っている場合じゃないと思うんだけどな)

楊鈴は呆れた表情で、連行されていく小蓮妃たちを見送った。

事件の詳細が明らかになったのは翌日の早朝だった。

幸いなことに患者たちの中毒症状はいずれも軽度だったため、全員回復へ向かって

いるらしい。だが下級妃の推測通り、問題の蜂蜜にトリカブトの毒が混入していることが判明した。

それを踏まえて、刑部省は小蓮妃を処刑する意向を発表したのである。

「あつという間に決まったねー」

「証拠が出ちゃったもんねー」

お茶請けの月餅を食べながら、梅桃コンビがのんきに事件の顛末を語り合う。二人の横では、銀流妃が真剣な表情でトランプタワーを作っていた。

「あんな女、今すぐ処刑されてもよくない？」

「よくありません」

血も涙もない発言をする銀流妃に、楊鈴はきっぱりと言い切る。

「証拠品だけで処罰を決めるのは、いささか早計だと思います。それに数種類の蜂蜜の中で、一つだけに毒が入っていたのも腑に落ちません」

「ふーん。そんなに気になるなら、小蓮妃の宮にでも行ってみたら？ 侍女たちは釈放されて戻ってるみたいだし」

「そうですね……」

何か手がかりが得られるかもしれない。茶を一気に飲み干すと、楊鈴は静かに腰を上げた。

「あなた方は確か銀流様の……」

小蓮妃の宮で楊鈴たちを出迎えたのは禾香だった。昨日の取り調べが相当堪えたのか、顔色が優れず、目の下には青白い隈が浮かんでいる。

「楊鈴が聞きたいことあるんだって」

「中に入ってもいい?」

勝手についてきた梅桃コンビが尋ねると、禾香の顔が強張った。

「え……い、今でしょうか?」

「はい。無理にとは言いませんが」

「……分かりました。こちらへどうぞ」

禾香が躊躇いがちに楊鈴たちを宮の中に招き入れる。その理由を察したのは、居間に足を踏み入れた時だった。

「うう……ひっく……久しぶりのお肉最高……っ!」

「糖分が全身に染み渡るわあ……」

机の上に並べられているのは豚の角煮や焼き鴨、小豆餡入りの包子に杏仁豆腐^{アンシンドウフ}など。侍女たちは嗚咽を漏らしながら、人目をはばからず皿の上の食べ物を貪り食っていた。

「お食事中すみません。皆さんにお聞きしたいことが……」

楊鈴が声をかけても、誰一人として応じようとしなない。

その光景はもはや食事ではない。すさまじい熱気と食器のぶつかる音。汁は飛び散り、肉の欠片が宙を舞う。ひっきりなしに響く咀嚼音が、不気味なりズムを刻んでいる。

「地獄絵図……」

「飢えた獣の群れ……」

梅桃コンビは目の前の有り様に、ただ圧倒されていた。

そんな中、禾香が気まずそうに重い口を開く。

「小蓮妃様は健康と美容のために質素な食事をされていますが、私たちもそれに合わせて肉や甘いものを一切口にしないようにと命じられていたんです」

「なるほど。つまり小蓮様が捕まったことで、その苦行から解放されて暴食に走っているというわけですか」

「はい……」

禾香は消え入るような声で返事をした。どうやら彼女はほかの侍女とは違うらしい。(道理で誰も小蓮妃を心配していないわけだ)

これに関しては完全に小蓮妃の自業自得である。彼女は後宮において最も頼りにな

るはずの味方を、独善的な振る舞いによって失ってしまったのだ。

「楊鈴、どうする?」

「助けないほうがいいかも……?」

自分たちが同じ立場に置かれたら、到底耐えられそうにない。侍女たちの境遇に同情してか、梅桃コンビが神妙な面持ちで提案する。

小蓮妃を見捨てようとしている二人に、楊鈴は渋い顔で片手を上げた。

「お気持ちは察しますが、そういうわけにはいきません」

そう言って、禾香をちらりと見る。

「禾香様、講習会で出された蜂蜜について詳しくお聞きしてもよろしいでしょうか?」

「は、はい。あれは小蓮様のご実家で作られたものなんです」

禾香は緊張気味に背筋を伸ばした。

「一年ほど前から試験的に養蜂を始めて、複数の土地で採蜜を行っていたと聞いております。採れた場所よって花の種類が違うので、産地ごとに分けて瓶詰めされていました」

「産地ごとに……」

禾香の説明に、楊鈴は事件当日のことを思い返す。講習会の会場にあった蜂蜜は、透明感のある淡黄色から深みのある赤褐色とそれぞれ色合いが異なっていた。

「完成したばかりの蜂蜜が届いたのは、あの日の早朝でした。催事や儀式を取り仕切る尚儀局の方々と毒見を兼ねて何種類か味見した時は何も問題なかったんです。あの時、すべて確認していれば、こんなことには……」

「済んでしまったことは仕方ありませんよ。それより、養蜂を始めるきっかけは何だったのですか?」

「私も詳しくは聞いていませんが、近所に養蜂場がありまして。手順などもそちらから教えていただいたとのことですよ」

「そうでしたか」

素人が安易に手を出したのかと、楊鈴は内心で呆れた。

「……小蓮様は悲しいお方なのです」

禾香が思いつめた表情で楊鈴をまっすぐ見つめた。その瞳は僅かに潤んでいる。

「あの方はご実家の商会のために、頑張ってきただけなのです。たとえ、ご両親から一つの駒としか見てもらえなくても……お願いします。どうか、小蓮様をお救いください!」

声を張り上げて、楊鈴に深々と頭を下げる。一瞬の沈黙のあと、楊鈴は静かに答えた。

「もちろん、そのつもりです。ですが、その前に一つお聞きしてもよろしいですか?」

「はい？」

「そこまで分かっているながら、何故今まで何もしてこなかったのですか？ 打つ手はいくらでもあったでしょうに」

楊鈴が言葉突きつけると、禾香は後ろめたさに目を伏せた。

結局、主を哀れだと思いつつも、自分に火の粉が降りかかってくるのを避けたいのだ。冬天宮に抗議に行こうともせず、宮に引きこもっているのがその証拠だ。

拳句には人任せにしようとしている。

その甘さに、楊鈴は正直腹が立っていた。

「……はい。おっしゃる通りです」

そう言つて、禾香はおもむろに顔を上げた。

「私はまだ間に合いますか？」

「それはあなた次第です」

「そう、ですよね」

張り詰めていた禾香の表情がふっと緩んだ。けれど、その瞳には確かな決意の光が灯っている。

(今さら遅いかもしれないけど)

とりあえず、事を進めるしかない。

「では、蜜を採取した場所をすべて教えていただけませんか？」

「ええ。蜂蜜と一緒に届いた手紙に書かれていたと思います。少々お待ちください」

禾香が小走りで居間から出て行く。その後ろ姿を見送る楊鈴に、梅桃コンビが話しかける。

「蜂蜜を作ったところ？」

「何でそんなこと聞くの？」

不思議そうに首を傾げる二人に、楊鈴は一言だけ告げる。

「蜂は悪食ですから」

小蓮妃が捕縛されてから数日後。

二人の人物が後宮の正門を通り抜け、宮内へ踏み込んだ。

「まったく……ここは相変わらず香の匂いがきついな。鼻が曲がりそうだ」

忌々しげに眉をひそめているのは、成人して間もないであろう線の細い青年だった。均整の取れた顔立ちをしており、不機嫌な表情さえも絵になるような美形だ。うなじの辺りで一つにまとめられた黒髪が、歩く度に揺れている。

彼の名は龍翔^{リウキョウ}。

今年刑部省に配属されたばかりの新人官吏である。

「そうかい？ 私はこの香りがそんなに嫌いじゃないんだがね」
 その後ろで朗らかに笑っている四十代半ばの男は柳成。刑部省に二十年以上勤めるベテラン官吏であり、龍翔の教育係だ。

「大体、何故柳成さんまでついてくるんですか。下級妃に処遇を通告するだけなら、俺一人で事足りるはずです」

「そういうわけにはいかんさ。だけど、小蓮って妃は本当に毒を入れたのかねえ。今も犯行を否認しているんだろう？」

「愚かな女ですよ。いくら身の潔白を訴えたところで、死罪は免れないというのに」
 道すがら言葉を交わしつつ、二人は冬天宮に辿り着いた。

ほかの建物と異なり、装飾が一切なく壁の塗装もところどころ剥けている。華やかな後宮の中、この場所だけは重く淀んだ空気が漂っていた。

重い扉を押し開けて中に足を踏み入れると、黒服の宦官が「お待ちしております」と丁寧にお辞儀をした。

「ああ。では早速だが、小蓮妃の処分を言い渡……」

その時、外からの騒がしい足音が龍翔の声を遮った。驚いて振り向いたと同時に、二人の宦官が冬天宮に駆け込んできた。

「異議あり!!!」

「まだ何も言っておらんわ!!」

力強く指を差してくる二人に負けじと、龍翔も声を張り上げる。

「同じ顔……貴様ら妖怪か!」

「普通に双子だろ」

柳成が冷静に指摘していると、再び扉がゆっくりと開いて背の高い武官を連れた宮女が姿を現した。

「どうやら間に合ったようですね。そちらは刑部省のお役人方でよろしいでしょうか?」

「……何だ貴様は」

龍翔に探るような眼差しを向けられ、宮女は深々と頭を下げた。

「申し遅れました。私は銀流妃に仕えている楊鈴と申します」

「銀流妃……ああ、あの問題児の!」

柳成が合点したように頷くと、楊鈴の背後で武官が僅かに顔を歪めた。

「左様でございます。本日は小蓮様の処刑を阻止すべく参りました」

「刑は既に確定している。部外者に口を出す権利はない!」

龍翔が間髪容れずにすげない口調で吐き捨てる。すると、柳成は笑いながら新人の肩を叩いた。

「まあ待て。話くらい聞いてやろうじゃないか」
 「そんな必要ありませんよ、柳成さん。あの女は下級妃たちの命を奪おうとした大罪人です。生かしてはおけない！」

「いえ。彼女は誰も殺そうとはしていません」

憤慨してまくり立てる龍翔に、楊鈴は臆することなく言い切った。

「なっ……何の根拠があつてそんなデタラメを……！」

「根拠でしたら、ここに」

楊鈴の目配せに応じて、蒼波が手にしていた紙を大きく広げる。それはいくつかの場所を丸で囲んである地図だった。

「小蓮妃が講習会でお出しになった蜂蜜の産地を記したものでございます。問題の蜂蜜はこちらで作られました」

細い指先が、赤い丸で囲まれた地点をトンと叩く。引き付けられるように、龍翔と柳成はその部分に顔を寄せた。

「そして、こちらにいる方に詳しく調べていただいた結果、この土地にはトリカブトが自生していることが判明したのです」

「トリカブト……あ、なるほど。そういうことか」

柳成がすべてを悟ったように呟く。こちらの役人は物分かりが早い、と楊鈴は

思った。

「ご推察の通り、蜜蜂たちがその花粉を運んできたことにより、蜂蜜に毒が混入してしまつたのです。しかし小蓮妃様はその事実を知らずに、講習会で提供してしまつた……そんなところでしようか」

「だ、だが、毒を巣に持ち帰つたら蜂たちも死んでしまうのではないか？」

龍翔が戸惑いを隠せない様子で疑問を呈する。

「実は蜜蜂は多くの植物毒に対して高い耐性を持つているのです」

「そうなのか!？」

「特に驚くことでもないと思いますが。私たちが普段口にしている葱やニンニクなども、犬猫にとつては猛毒ですから。トリカブト、馬酔木、あせび躑躅……有毒植物の周辺では採蜜を控えるのが養蜂家の鉄則ですが、小蓮様のご実家は皆から疎まれていてせいで、意図的に教えてもらえなかつたのでしよう」

「よし。ならば、その養蜂家も直ちに罰すべきだな！」

「それはおやめになつたほうがよろしいかと」

無駄に血の気が多い官吏に、楊鈴はすかさず水を差した。

「何故教えなかつたのかと問いただしたところで、『忘れていた』か『教えたのにそちらが聞いていなかった』で済まされるだけだと思いますよ。確固たる証拠もないの

立ち読みサンプル はここまで